

令和元年度
「舞鶴版・地方創生についての市民レビュー」

報 告 書

令和元年 12 月

令和元年度『市民レビュー』市民の提案・意見のまとめ

10月26日（土）に開催された「市民レビュー」では、市民審査員の皆さんから多くの意見・提案等が寄せられました。市民の市政への参加意欲をさらに高めるためにも、これらの意見等を受け止め、可能なものは今後の施策に生かす方向で検討を進めていただくよう、お願いいたします。

令和元年 12月 27日

令和元年度「市民レビュー」コーディネーター
京都府立大学公共政策学部 教授 窪田 好男

【全体総括】

心が通う便利な田舎暮らしの実現に向け、新たな技術を地域社会に実装していく取組「舞鶴版 Society5.0 for SDG s」の基本的な考え方について、市民審査員をはじめとする参加者にとって理解を深める契機となった。

AIやIoTなど、新たな技術や試みを導入するにあたっては、利便性や効率性の向上、そして新たな価値の創造が見出せる反面、これまで慣れ親しんできた仕組みや物事を失う事態と受け止められる側面も有している。

これらの事業を進めるにあたっては、なぜこのような取り組みを行おうとするのかを丁寧に説明いただき、市民の理解を得る努力はもちろんのこと、新たな仕組みに対するインセンティブや楽しさなど、多くの人々が利用してみたいと思える仕掛けが重要である。AIのような新しい技術については、その可能性や良さを、見て、触れて、感じられるようにしながら進めることが重要である。



令和元年度 市民レビューについて

≪今年度の市民レビューについて≫

◆概要

第7次総合計画を市民と一丸となって推進するため、本市の重点施策に関する取り組みを理解いただくとともに、「取り組みをよりよいものにするにはどうすればよいか」という視点で市民レビューを実施した。

第1部では、舞鶴市第6次総合計画の総括と第7次総合計画の理念について、多々見市長が説明を行なった。

第2部では、舞鶴版 Society5.0 for SDGs の中から2つの重点施策の取組について市の担当者が説明したあと、市民審査員が意見交換と評価を行った。

◆参加者

- ◇ コーディネーター 窪田好男 京都府立大学公共政策学部教授
- ◇ アシスタント 1名（京都府立大学大学院公共政策学研究科 大学院生）
- ◇ 補助員 1名（京都府立大学公共政策学部 学部生）
- ◇ 市民審査員（13名）
 - みらい戦略推進会議 6名
（舞鶴商工会議所、舞鶴市民生児童委員連盟、FM まいづる、舞鶴市老人クラブ連合会、舞鶴市PTA連絡協議会、京都北都信用金庫）
 - 学生 3名
（舞鶴工業高等専門学校、京都職業能力開発短期大学校、舞鶴YMCA 国際福祉専門学校）
 - 市民（無作為抽出） 4名
- ◇ 傍聴者（50名）
- ◇ 事務局（11名）

◆内容

【第1部】舞鶴市の重点施策について（多々見市長から）
～便利な田舎暮らしに向けた舞鶴版 Society5.0 for SDGs に向けて～

【第2部】市民レビュー

舞鶴版 Society5.0 for SDGs に関する2つの取組について、市担当課からの説明を受けたのち、市民審査員同士の意見交換及び評価を実施

- 第1テーマ「防災（モニタリング）」
- 第2テーマ「共生社会」

第1部 舞鶴市重点施策について ～便利な田舎暮らしに向けた

舞鶴版 Society5.0 for SDGs の取組について～

(1) 多々見市長からの説明（要旨）

- ・ 市長に就任した平成 23 年から現在に至るまで、明確な方針・方向性を示しながらまちづくりに取り組んできた。
- ・ 第 6 次総合計画では「子どもからお年寄りまで安心して暮らせるまち・舞鶴」を目指すこととし、民間企業が持つ意識を見習い、市役所は市民の役に立つ所になれるよう行財政改革を行ってきた。
- ・ 平成 23 年度から平成 30 年度にかけては、京都舞鶴港の活用について呼びかけ、クルーズ船の入港の増加を目指して海外に出向き、舞鶴港について PR し、また、赤れんがパークを拠点とした観光施策を進めてきた。また、高速道路の開通や港の整備など、将来に向けた基盤整備促進にも注力してきた。
- ・ 第 7 次舞鶴市総合計画では、「次代を担う若者や子どもたちに夢と希望をお年寄りには感謝を」という理念のもと施策を行っていく。
- ・ 若者や子供たちが、「舞鶴市に住み続けたい」、「一旦外に出ても帰ってきたい」と思えるまちづくりを推し進めるとともに、今までの経験や知識を生かして活躍したいと考える元気なお年寄りに対しても、活躍できる場、社会との関わりを持てる機会を提供していきたいと考えている。
- ・ 舞鶴市は、四季折々の自然をはじめ、豊かな歴史・文化を有しており、子育てするにも恵まれた環境にある。また、舞鶴から大阪や神戸など京阪神のまちに行くには、2時間以内で行くことができ、舞鶴に住んでいながら、簡単に都会へ足を運ぶことができるようになった。
- ・ このような状況の中、舞鶴市としては、かつて田舎に対して抱かれていた“不便”なイメージを、新たな技術を用いて“便利”に転換し、舞鶴で生活すれば「心が通う便利な田舎暮らし」ができるということをアピールしていきたいと考えている。
- ・ まちづくりを進めていくには、企業が得意なこと、教育機関が得意なこと、行政が得意なこと、それぞれ異なる。各主体が得意なことを生かしなが、不得手なところは補いあいながら“全員野球”の精神でともにまちづくりを行っていききたいと考えている。



第2部 市民レビュー「舞鶴版 Society5.0 for SDGs」の取組

第1テーマ 「防災（モニタリング）」

（1）担当課による説明（概要）

◆説明者

舞鶴版 Society5.0 推進本部
モニタリングチーム リーダー
（下水道整備課 浸水対策担当課長） 東山 直

◆説明内容（趣旨）

防災（モニタリング）は、災害に対応するためビッグデータとAIによるまち全体の見守りを行う取組である（オムロン、舞鶴高専、KDDIと連携）。

現在、台風や豪雨等により災害が発生した際、市内の状況を把握するには市職員をはじめとする“人”が現場に駆けつけて確認し、道路システムや河川システムなど、それぞれ個別のシステムを通じて情報発信しているところ。

近年、災害が大規模化・複雑化するにつれ、災害時の対応も多様化が進んでおり、市内インフラの状況確認を限られた人的スタッフで続けていくにはやがて限界が来る。

この現場の状況を把握する方法を、新たな技術を用いてリアルタイムに一括管理できるようにし、市民の皆さんも共有できる仕組みを築こうとするものである。



（2）意見交換

①モニタリングに関する懸念

【デジタル弱者への配慮】

- ・ 個人差はあるものの、ITなど新しいものに対して、高齢者はなかなかなじみず、一度聞いただけでは覚えることができない。そのような中で、どのように情報を把握し、避難行動に結びつけていくのが不安。
- ・ 普段インターネットを利用しない方など、ネット環境にない方々が取り残されることにならないか。
- ・ 情報はテレビ、ラジオ、広報紙、ラジオなどに頼っており、安全に対応できるのか不安。

【モニタリングシステムへの不安】

- ・ システムに不具合が生じた場合はどうなるのか。
- ・ 大規模な停電が起きた場合でもシステムが機能するような着意が必要。
- ・ 用途に合わせた多様なセンサーを活用するとのことだが、高潮や豪雨、暴風、土砂崩れなどで正常に機能しないことがあるのではないか。

- ・ アクセスが集中し、データを受信できなくなるのではないのか不安。
- ・ AI が誤判断することへの懸念。

【その他】

- ・ AI やビッグデータに頼ってしまうことに不安を感じる。
- ・ 先進技術を駆使した取り組みは理解できるが、受け取った情報に基づき、避難などの行動に移せるのか、実際の行動に不安が残る。各町内におけるご近所やお隣さんとの日頃のお付き合いが防災に結び付けばと思う。

②懸念を踏まえた今後の取組について

- ・ 取組の方向性は理解できる。市民からすればその情報を用いてどう動いていくべきかが大事。
- ・ デジタル弱者のことを考え、知る機会を増やすことが大事。
- ・ 避難指示や勧告が頻発する中、外の様子を見たい気持ちもある。水位情報だけでなくライブカメラを一層駆使して、現場の状況が容易に把握できる仕組みが欲しい。
- ・ 最近はSNSを使う方が多い。特に若者には、多重層になりがちなホームページよりも即時性のあるSNSが有効と考える。
- ・ 2030 年を見据えることも大事だが、明日の身を守るための取組も大切。
- ・ 災害時の避難経路、交通情報をリアルタイムに伝えてほしい。多言語化も必要。
- ・ 避難情報の伝達を防災無線やコミュニティ FM のような従来の手段だけに頼るのではなく、AI と携帯電話・SNS の組み合わせなども模索することが必要。
- ・ 高齢者をはじめとするデジタル弱者や、小中学生も巻き込んだ取組にしていきたい。

(3) 市民審査員による評価結果

①より力を入れて推進する	②今のやり方で進める	③やり方に工夫が必要
5	2	6

(4) コーディネーターによる総括

モニタリングの取組が進める方向性は理解されたところだが、進めるにあたっては工夫が必要との評価であったと考える。

これは、モニタリングシステムが、今“自分達のもの”になっていない点、新たな技術を導入することによって、自分達のものになりそうにないかもしれない、という不安が起因しているのではないかと考える。

ビッグデータと AI によるまち全体の見守りは、防災にとどまらず、防犯上の観点や認知症等による行方不明者の発見にも有効と期待される。一方で、プライバシーの問題を重視して進める必要がある。

現在の市の取組は検討中のものであることから、今後はこれらの意見を踏まえながら、進めていただくことを期待する。

第2テーマ 共生社会

(1) 担当者による説明(概要)

◆説明者

舞鶴版 Society5.0 推進本部
共生チーム チームリーダー
(地域づくり支援課 課長) 飯田 徹



◆説明内容(趣旨)

近年、地域コミュニティが希薄になる中で、以前は隣近所で当たり前に行われていた些細な困りごとの相談が気軽にできないと感じる方が増えてきた。他方、仕事を退職し、時間に余裕があったり、得意な分野があったりする方々が多くいながらもそれらを生かすことができる場面が少ないという現状もある。

困りごとがある人と助けることができる人がつながり、それぞれの得意分野を生かした“助け合い”の仕組みが、うまく見出していけるシステム構築の検討状況について紹介。

(2) 意見交換

①共生社会に関する懸念

【地域コミュニティ】

- ・ 少子高齢化、核家族化、共働き、独居世帯の増加等により、地域コミュニティが希薄化し、自治会そのものが崩壊しないか不安。
- ・ 地域子ども(若者)の流出により、雪かきや地域清掃の参加層が高齢化している。自治会の担い手がいなくなりつつある。
- ・ 自治会の仕事を役付きの人だけに任せるのではなく、分担できる仕組みが必要である。
- ・ 集合住宅の住民が自治会に加入しない傾向にある。自治会に加入している人でも関わりの薄い人と接するのは難しい。
- ・ 一定の年齢から学童等での預かりがないため、子守りをしてくれると助かる。
- ・ 地域プールも責任の問題により引率者がいない。一時預かりをお願いしても100%安全なのか不安である。
- ・ 昔は当たり前に行っていたことができない環境になっている。地域で子どもを見守る社会ではなくなっている。
- ・ 車が無いとどこにも移動できない。



【意識】

- ・ 自分にできることがなく、お互いに助け合うことができないことが多いと感じてい

る。

- ・ 助け合いの中でも「できること」「できないこと」が存在するが、小さなことでも「できること」を表明できれば「お互いさま」に繋がると考える。
- ・ 「助けてほしい」と思っている人ほどなかなか人には言えない。遠慮や不安、「自分が頑張らないと」という思い込みをはずして地域の人に心を開く必要がある。
- ・ 他人の家に介入してほしくないと思う人も多いと感じる。
- ・ お互い様よりも余計なお世話になるのではないか。

【マッチングシステム（新たな技術を用いたマッチングの仕組みについて）】

- ・ 木々の剪定や樹木伐採など、困りごとへの支援対策についてはすでにシルバー人材センターがほとんど行っている。
- ・ サービスが無料だといい加減になる恐れがある。
- ・ システムの導入にあたっては、起こり得るリスクについてももう少し考えるべき。何か起きた場合の責任は誰がとるのか（個人情報扱い、誘拐、事故等）。
- ・ マッチングシステムの構築には信頼性の担保が必要不可欠である。
- ・ マッチング方法として、アプリは高齢にとって扱いにくいのではないか。
- ・ 「地元の掲示板ジモティー」のような既存の民間サービスもある。それとどう違うのか、どう新しいのか、説明を聞いてもよく分からなかった。
- ・ 見返りのある関係はボランティアの関わるコミュニティの崩壊に繋がらないか心配。
- ・ 有価サービスがボランティアとなり、企業の売上に影響しないか。共生社会と「Society5.0」がイメージ的に結び付かない。

②今後の取組にあたって

- ・ 地域行事への参加を促す仕組みが必要である（老若男女が参加できる行事）。
- ・ 自治会で組長が集い、誰がどのようなこと（助け）を必要としているかを自治会で把握することが有効かもしれない。
- ・ 地域の連絡網や意見箱を設置し、困りごとの可視化を実施してはどうか。
- ・ 若者や高齢者など多世代が日常的に集える場所と機会を提供し、地域の繋がりをつくってはどうか。
- ・ 若者は人付き合いが苦手な人が多いと感じる。若者をどのように巻き込むかがポイントだと考える。
- ・ 車がない人にとって助け合いで乗せてもらえる仕組みがあれば有効と考える。
- ・ 自分にできるとことや助けてほしいことがあれば些細なことでも手をあげる積極性も大事と考える。
- ・ 信頼性が確保できれば、提案されたシステムは画期的な取組になる。まずは、限られた範囲でマッチングの実証実験を行うことが有効と考える。

- ・ 支援の回数に応じて市内で使用できるポイントを発行するなど、担い手（支える人）へのインセンティブが必要と考える。
- ・ 舞鶴市には小さな団体がたくさんあるため、小さな団体を一つのグループとしてユーザー登録し、「してあげられること」を掲げることで、マッチングしやすくすることが有効と考える。
- ・ 会員登録の掲示板を行政が管理し、利用者の電話によって担い手（企業や市）に困りごとの解決をパスする仕組みづくりができないか。
- ・ ボランティア情報が共有できるプラットフォームがあれば大変有意義と考える。
- ・ スマホも進化し、高齢者も使いやすくなり普及も進むと思う。
- ・ 「AI」がやった方がいいこと、「人」がやった方がいいことを役割分担することが大切である。
- ・ 共生の仕組みづくりは必要。市民、コミュニティ、企業、行政がそれぞれの立場で協力することが大事である。

(3) 市民審査員による評価結果

①より力を入れて推進する	②今のやり方で進める	③やり方に工夫が必要
1	1	11

(4) コーディネーターによる総括

困りごととそれに対する支援など、「お互いさま」を新しいプラットフォームでマッチングするのが今回のテーマであった。

アプリ等を通じてユーザー登録が求められるシステムは、不特定多数の人にご自身の情報が知れ渡るリスクがあること、AIが本システムで想定するようなマッチングを適切に行えるということをイメージしにくかったこと、また、信頼性をはじめとするマッチングへのリスク管理への課題が不安視されることから、今後、検討を進めるにあたっては工夫が必要との評価であったと考える。

このような新しいことを導入するにあたっては、「インセンティブ」や「楽しさ」など、多くの人が親しみを持ち、利用したくなるような仕掛けも意識する必要があると考える。

以上